



Hatakeyama Shigetada

語り継がれる雄姿

武蔵武士の鑑

畠山重忠

【Hatakeyama Shigetada】

【文化財マップ】



スタンプ設置場所

川本出土文化財管理センター
深谷市内で発掘された出土品の保存管理を目的として設置された施設です。



■開館時間/9:00~16:30 P 駐車場有り
■休館日/土曜日、日曜日、祝日
■住所/〒369-1104 埼玉県深谷市菅沼1019
【お問い合わせ】 Tel.048-583-6019

スタンプ押印欄

⚠ インクが完全に乾く前に台紙に触れると、手や衣類に付着することがあります。ご注意ください!



【畠山重忠関連史跡】

鶯の瀬

うぐいすのせ
地元では「重忠が郎党の榛沢成清の館(現深谷市後榛沢)へ行った帰り豪雨となり、川が増水して荒川を渡れず困っていたところ、羽の鶯が飛んできて美しい鳴き声で鳴きながら浅瀬を教えてくれたため無事に渡ることができた」と伝えられています。



鶯の瀬(碑)

【重忠が詠んだといわれる歌】
時ならぬ 岸の小笹の
鳴き渡るらん
鶯は 浅瀬たずねて

井棕神社

井棕神社の北にあり、畠山氏が秩父からこの地に進出してきた際に、現秩父市下吉田にある榎神社(式内社)を勧請してきた神社と伝えられています。榎神社は代々秩父平氏の守護神として崇敬されており、当井棕神社も畠山氏の守護神だったと推測されます。



満福寺

井棕神社の南にあり、白田山観音院満福寺という真言宗豊山派の寺院です。平安時代の開基で、畠山重忠が寿永年間(二八二~二八四)に再興し、菩提寺としたと伝えられています。現在の建物は江戸時代以降のもので、観音堂には畠山重忠等身大の千手観音立像があり、境内には重忠廟の石碑などがあります。



畠山重忠公史跡公園 (畠山館跡・畠山重忠墓ほか)

はたけやましげただこうしせきこうえん
重忠が誕生したと伝わる「畠山館跡」(埼玉県選定重要遺跡)のあった場所が整備され、畠山重忠公史跡公園がつけられました。産湯の井戸、畠山重忠墓(埼玉県指定史跡、嘉元二年(三〇四)銘の石碑(市指定文化財)、重忠を詠んだ芭蕉句碑、重忠の父重能の墓(市指定文化財)などがあります。有名な逸話で、この谷の戦いの「鶴越の逆落とし」の場面で、愛馬「三日月」を背負って坂を下った重忠の雄姿を表した銅像もあります。



大型五輪塔(高さ169cm)

嘉元2年銘石板

本田城跡

鎌倉時代から室町時代に築かれたと考えられ、畠山重忠の郎党本田近常族の館跡といわれています。形は長方形で、約四ヘクタールの広さで空堀や土塁の一部が残っています。



お問い合わせ

深谷市教育委員会 文化振興課

☎048-577-4501 [平日/午前8:30~午後5:15]

武勇誉れ高く、清廉潔白。
「武蔵武士の鑑」と称された

はたけやま しげたただ

畠山重忠



重忠の誕生と源頼朝の挙兵

畠山重忠は、平安時代の終わり頃から鎌倉時代のはじめにかけて活躍した武蔵国を代表する武将です。祖先は、桓武平氏の流れをくみ、武蔵国において大きな勢力を持った秩父氏といわれています。父は畠山重能、母は三浦義明の娘もしくは江戸重継の娘で、長寛二年(一〇七〇)に現在の深谷市畠山の地に誕生しました。幼名を氏王丸といひます。重忠が十七歳の治承四年(一一八四)、以仁王の命令を受け、源頼朝が伊豆で打倒平氏を目指して挙兵します。しかし、石橋山の合戦に敗れ、安房に逃れました。当時、畠山氏は平氏に仕えており、父重能は京都大番役で不在だったため、重忠が平氏方として鎮庄に向かいます。重忠は、その途中で源氏方の三浦氏の衣笠城(神奈川県横須賀市)を攻め落としています。

安房国で再起をはかっていた頼朝は、敗戦から約1か月後には二万七千騎もの大軍を味方することに成功します。重忠は腹心の部下である榛沢成清に相談し、頼朝の軍門に降ることを決めました。重忠と対面した頼朝は、重忠の堂々とした態度や受け答えに感心し、従うことを許しただけでなく、以降の戦いで名譽ある先陣を任せることにしたと伝えられています。頼朝の配下に入った重忠は、さっそく、武蔵国から鎌倉へ向かう頼朝の先陣を任されています。

源頼朝に仕えて

重忠は、その後も頼朝に従い、木曾義仲追討、平氏追討、奥州合戦など数多くの戦いに参戦し、大いに活躍します。例えば、元暦元年(一一八四)の宇治川の戦いでは、義仲を討つため冬に宇治川を歩いて渡り、敵のいる対岸へ味方の大串重親を投げ上げた話が伝わります。さらに、同年の一の谷の戦いでは、「鶴越の逆落」とし、の場面に、愛馬「三月月」を背負って崖を降りるなど、重忠の剛力ぶりがうかがえる逸話が数多く残されています。



愛馬を背負った重忠の銅像(6m)／畠山重忠公史跡公園

文治元年(一一八五)の壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡したあと、重忠は文治五年(一一八九)の奥州合戦にも従軍しています。奥州の阿津賀志山(福島県伊達郡国見町)で行われた合戦では、重忠は人夫を使って敵方の城の堀を埋め、味方の進軍を助けるなど活躍しています。また、頼朝軍が奥州合戦のため鎌倉を出発する際には、重忠は頼朝率いる本隊の先陣をつとめました。奥州合戦を終えた頼朝は建久元年(一一九〇)に京都へ上洛を行いますが、その時の名譽ある先陣を任されたのも重忠でした。上洛の行列には、重忠の郎党である本田近常や榛沢成清のほか、岡部忠澄や猪俣範綱も名を連ねています。

重忠の最期

建久三年(一一九三)に征夷大将軍に任じられた頼朝でしたが、正治元年(一一九〇)に亡くなり、息子頼家が二代將軍となります。頼朝亡き後、鎌倉幕府の有力御家人であった北条時政は、比企能員を滅ぼし、次期將軍の美朝(頼家弟、当時は千幡)の後見人として絶大な権力をにぎります。しかし、北条氏は一族の内部で、時政の後妻牧の方と、前妻の子義時・政子が対立していました。

そのような状況の中、重忠の息子重保が牧の方の娘婿平賀朝雅と口論になってしまいました。怒った牧の方は、夫時政に、重忠父子が謀反を企んでいるため討伐すべきと讒言してしまいます。

そして元久二年(一一〇五)六月二十二日、重保が由比ヶ浜で討ち取られました。重忠も鎌倉に事件ありとの報に接して、わずか百三十四騎を率いて二俣川(神奈川県横浜市旭区)まで来ていました。そしてこの地で、重保が討たれたことや、自らにも討伐軍が差し向けられていることを知ります。重忠郎党の本田近常や榛沢成清は、度菅谷館(嵐山町)に退き、態勢を整えてから戦うことを進言しますが、重忠は「ここで引き返しては、謀反の企みをもつていたと後々言われてしまうかもしれない。武士の誉れを汚したくない。」として戦うことを決めました。数方を数える討伐軍に対し、重忠率いる百三十四騎は勇敢に戦いましたが、四時間もの激戦の末、ついには重忠は愛甲季隆の放った矢にあたり、四十二年の生涯を終えたのでした。

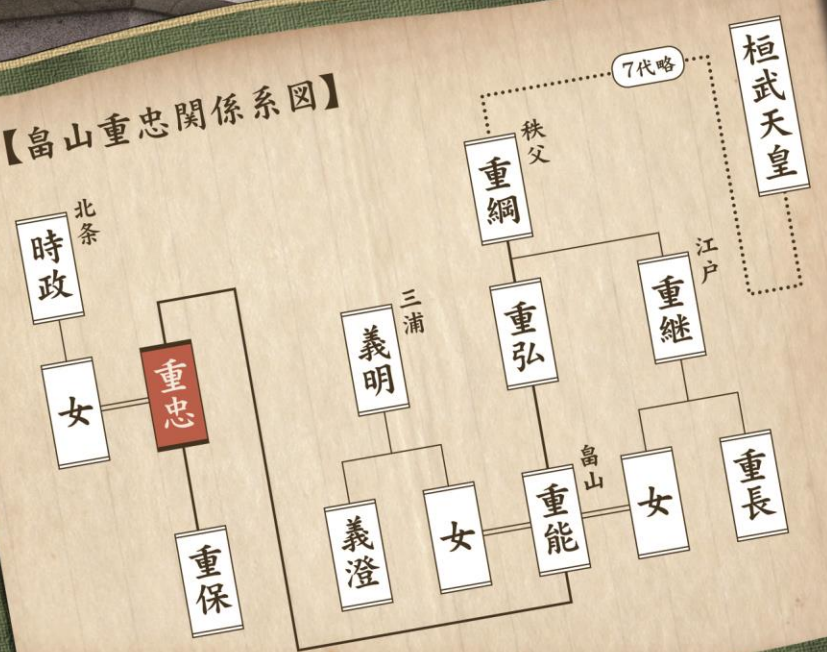
畠山重忠関係略年表

〔年号(西暦)〕〔歳〕

〔出来事〕

長寛二年(一一六四)	1	重忠、武蔵国男衆郡畠山館(現深谷市畠山)で生まれる。父は畠山重能、母は三浦義明の娘または江戸重継の娘。幼名は氏王丸。
治承四年(一一八四)	17	源頼朝、伊豆で挙兵。重忠、平氏方として鎌倉由比ヶ浜で三浦義澄と合戦。郎従五十余人死す(小坪の戦い)。重忠、河越重頼、江戸重長らと三浦氏の居城衣笠城を攻め落とす。三浦義明自刃。
重忠、長井の渡りまたは石浜(現東京都台東区)で頼朝と参会い、従う。頼朝、平氏討伐のために鎌倉に向かい出陣する。重忠先陣をつとめる。源義経、奥州より頼朝のもとへ参する。		
平清盛死去。	18	
寿永二年(一一八三)	20	平家都落ち。
元暦元年(一一八四)	21	宇治川の戦いで、重忠、丹党以下五百騎で川を渡る。(平家物語)源義経、近江国栗津(現滋賀県大津市)で討死。
文治三年(一一八七)	23	重忠、一の谷の戦いに参加。鶴越の逆落とし。(平家物語、源平盛衰記)鶴岡八幡宮別当坊で音曲あり。重忠は今様を歌う。
文治元年(一一八五)	22	屋島の戦い。重忠、義経より扇の的を射よと命ぜられるも固辞し那須与一を推す。(源平盛衰記)平氏、壇ノ浦にて滅亡する。
文治二年(一一八六)	24	義経、京都を追われる。
文治二年(一一八六)	23	静御前、鶴岡八幡宮で舞を舞う。重忠、銅拍子で伴奏する。
伊勢国田御厨の代官が不正をはたらく。地頭である重忠が訴えられる。重忠、囚人として千葉胤正に預けられる。所領四か所は没収される。		
千葉胤正の仲介により許され、重忠、武蔵国に帰る。		
梶原景時、重忠に謀反の意ありと頼朝に讒言する。下河辺行平、重忠を伴い鎌倉へ戻る。		
重忠、起請文を書くようにいわれるも拒否する。		
源義経、奥州衣川館で自害。		
文治五年(一一八九)	26	奥州合戦開始。重忠、先陣をつとめる。
重忠、阿津賀志山(現福島県伊達郡国見町)の戦いで城郭の堀を埋める。		
重忠、梶原景時に代わり、由利維平の尋問を行い、その身を預かる。		
重忠、勲功の賞として陸奥国葛岡郡(現宮城県大崎市)を与えられる。		
頼朝、上洛のため鎌倉を出発。重忠、上洛の先陣をつとめる。		
重忠、頼朝の命で多好方に神楽を習う。		
重忠、永福寺建立のため木材を運び怪力を表す。		
頼朝、征夷大将軍に任じられる。		
重忠、永福寺庭池の巨石をひとり運び据える。		
重忠、頼朝から丹党と児玉党のあらそいの仲裁を命じられる。		
鶴岡八幡宮神楽あり。重忠、神楽にて付歌を歌う。		
頼朝、東大寺供養のため上洛。重忠、先陣をつとめる。		
頼朝、死去(五十三歳)。重忠、嫡子頼家のことを託される。		
頼家、十七歳で將軍の跡を継ぐ。		
將軍の親政を排し、十三人による合議制とする。		
重忠、梶原景時の糾弾連署状に署名する。		
翌年二月二十日、梶原一族討たれる。		
頼家、征夷大将軍になる。		
建仁二年(一一二〇)	39	頼家病気のため、子一幡と弟実朝に権利を分与。
建仁三年(一一三三)	40	比企一族討たれる。重忠、比企氏討伐軍に連なる。
元久元年(一一〇四)	41	実朝、征夷大将軍となる。
頼家(二十三歳)、伊豆修善寺で謀殺される。		
重忠の子・六郎重保、京都守護の平賀朝雅と口論する。		
重忠、重保父子の勘当が解ける。(平某書状案「鳥津家文書」)		
重忠、武蔵国菅谷館を出発し鎌倉へ向かう。		
重保、三浦義村に由比ヶ浜で討たれる。		
重忠、二俣川で北条義時・時房率いる大軍に襲われ、重忠以下百三十四名討死。義時ら鎌倉に帰る。重忠の無実の死を悲しむ。		

【畠山重忠関係系図】



重忠産湯の井戸 (畠山重忠公史跡公園/深谷市)



銅拍子(模造品) (埼玉県立嵐山史跡の博物館 所蔵)



重忠の旗印「小紋の村瀬」 治承4年(1180)に重忠が頼朝に従った際に、頼朝より、自らの旗印(源氏の白旗)と区別するために藍で染められた軍を号えられたことから生まれたと伝わる。